海外の保育者・保育学生を対象とした オンラインアンケート調査の試み

佐々木　宏　之
郷　　慎太郎[1]

はじめに

かつてはパソコン通信と呼ばれていたデータ通信の世界に、ユーザビリティとアクセシビリティに優れるインターネットが普及すると、電子掲示板、ブログ、SNS、Twitterといったネットワークサービスが次々と生み出されていった。それに伴って、ヒトの繋がりや社会の在り様も、IT革命という言葉の通り、劇的な変貌を遂げている。そして、社会が変われば、私達の心の働き、心の仕組みも変容は避けられない。最近報告された神経科学研究によれば、Facebook上の友人が多い人ほど社会的認知能力に関連する脳の領域（上側頭溝、中側頭回、嗅内皮質）が大きくなるという（Kanai, Bahrami, Roylance, & Rees, 2011）。ところが、現実世界の友人の数には、脳領域との間にこのような関連性は見られない。インターネットが脳の構造を短期的に変えることを示した驚くべき報告である。

インターネットが現代社会のあらゆる側面に浸透する中、心理学もインターネットを扱った研究、すなわちネット社会における心の振舞いに着目した研究（Kiesler, Siegel, & McGuire, 1984）やインターネットを介した調査・実験（Birnbaum, 1999; McGraw, Tew, & Williams, 2000）を行ってきた。しかし、多くの研究者はこれだけのインパクトをもたらしたインターネットを研究活動の支援ツールとして利用するだけで、インターネットを研究テーマそのものに取り入れる利点はほとんど認識されていない。そこで本論文は、インターネット研究に関するBirnbaum（2004）の総説と Kraut, Olson, Banaji, Bruckman, Cohen, & Couper（2004）の総説に基づいて、インターネット調査を行う利点、インターネット調査に潜む問題点、実施上の注意点を確認し、我々が実施したオンラインアンケート調査「男性保育者に関する海外保育者・保育学生の意識」の報告を行う。我々が行った調査については、ホームページの制作からデータ収集に至るまでを詳述することで、今後のインターネット調査への参考資料を提示する。さらに、アンケート調査の結果について、インターネット研究の観点と男性保育者の異文化比較の観点から考察を加える。

1　新潟中央短期大学学生。本論文は新潟中央短期大学平成23年度卒業論文において行ったオンラインアンケート調査をもとに作成された。

インターネット調査の利点

心理学研究にとって、インターネット利用は３つの利点がある。第一に、従来の実験室実験や質問紙調査とは異なるタイプのデータが得られること。例えば、チャットやBBSにおけるやりとりの観察からは、コミュニケーション、偏見、噂や流行の伝播といった問題について、従来の研究手法では得られない新たな知見が得られるだろう。また、集団の発生・進化（Baym, 1998）や集団の長期学習（Bruckman, Jensen, & DeBonte, 2002）に関する研究は、大人数の対象者を長期間追跡するコストが甚大になるため、これまでは研究すること自体難しいテーマであった。インターネットが可能にしたこうした研究からは、既存のモデルを補完するだけでなく、新たなモデルの構築が期待できる。

第二の利点は、インターネット自体が新しい社会現象を生み出し、新たな研究素材を提供している点である。Facebookのユーザーは全世界で８億人に達し（2011年現在）、オバマ大統領のTwitterのフォロワーは1000万人を超す。日本国内では、ミクシィユーザーは1500万人、２ちゃんねるは1000万人を超すと言われている。これらユーザーによる超巨大社会集団は、他の組織集団（企業組織や国家）にはない意思伝達の広がりと情報伝播の即時性を発揮し、インターネットによる社会的ネットワークは文化や国境を越えて個人や集団のアイデンティティに変容をもたらした。TwitterやFacebookが中東の民主化運動に大きな役割を果たしたのは記憶に新しいところである。冒頭に紹介した神経科学的知見にも見られるように、インターネットは機能的にも機構的にも私達の心に根深い影響を及ぼしていると言って間違いない。

そして、第三の利点は方法論的有用性に関するものである。インターネットを介した調査依頼や募集広告、インターネットを介した実験やアンケートには、人件費や郵送費などのコスト削減につながる経済的なメリットと、年齢、社会階層、国籍を問わず、多様で莫大なサンプルが得られるというデータ収集上のメリットがある。したがって、比較文化研究はこれらのメリットからもっとも多くの恩恵を受けられるテーマということになるであろう。ただし、インターネットを介して収集されたデータが、研究に耐え得るだけの質を備えているかという点については、注意深く検討されなければならない。次節では、そうしたインターネット利用の問題点を整理する。

インターネット調査の問題点

インターネット調査の利点は問題点と表裏一体の関係にある。インターネットによるアンケートや実験の自動化は、データ収集の効率を格段に高める一方で、遠隔操作という性質のために、倫理的な問題を把握しきれない危険性と、データの信頼性や妥当性が十分に保証されない欠点が内在する。

倫理的問題

実験やアンケートの内容が意図せず協力者を不快にさせたり、心理的に傷つけたりするリスクがあるとき、実験室実験であれば本人の意思確認をしながら適切な対応が採れるが、インターネットを介した実験やアンケートでは協力者の反応をリアルタイムに監視できないという問題がある。とはいえ協力者側からすれば、実験室実験は中途での終了を訴えづらいのに対し、インターネット実験は不快に感じたときはドロップアウトすればよいので、必ずしも倫理的なリスクは高くないという見方もある。

もう一つの問題は、協力者が実施前の教示やインフォームドコンセント、あるいは実施後のデブリーフィングの内容を十分に理解していない可能性である。これらを放置すると、思わぬところで倫理的問題に発展する恐れがある。その予防策としては説明内容の理解度のチェックが考えられるが、そうした調査内容以外の追加項目がアンケートの回答率を下げる要因になるという報告もある(O'Neil, Penrod, & Bornstein, 2003)。このような問題も実験室実験であれば、対面コミュニケーションを通して簡便かつ徹底した倫理的配慮を施すことで解決できる。

データの質の問題

結論から言えば、インターネットを介した実験やアンケートが、実験室実験や紙面のアンケート調査に比べて質的に劣るということはない。インターネット調査による結果の再現性は高く（Krantz & Dalal, 2000）、提示時間を操作するような認知実験や反応時間測定でさえ実験室実験と比べて遜色ない結果が得られることが確かめられている（McGraw, Tew, & Williams, 2000; Stevenson, Francis, & Kim, 1999）。Gosling, Vazire, Srivastava, & John（2004）は、“インターネットを使った研究を信用すべきか？”と題した論文において（Srivastava, John, Gosling, & Potter, 2003も併せて参照のこと）、インターネット調査への先入観に対して回答を示し（表１）、インターネットにより得られたデータが心理

表1　インターネット研究についての6つの先入観（Gosling et al., 2004より作成）

先入観		結論	
1	インターネットのサンプルは、人口統計学的に多様性がある。	△	インターネットのサンプルは、多くの点で従来の方法によるサンプルより多様だが、母集団を完全に代表するものではない。
2	インターネットのサンプルは、環境不適応者で、社会的に孤立し、抑うつ状態にある。	×	インターネット利用者は、適応と抑うつに関して非利用者と違いはない。
3	インターネットのデータは、調査の表示形式の影響を受けるため一般化できない。	×	異なる表示形式でも、Big Five性格テストのデータは再現された。
4	インターネット上の協力者は動機づけが低い。	×	インターネットは協力者の動機づけを高める手段を提供できる（例えば、フィードバック）。
5	インターネットのデータは、匿名性のために信用できない。	○	しかし、信頼性を高める工夫はできる。
6	インターネットのデータは、他の方法で得られたデータとは異なる。	×	これまでの証拠ではインターネットによるデータと従来の方法によるデータは一致しているが、もっと多くの研究が必要。

学研究に貢献し得ると結論づけている。彼らの指摘の通り、インターネット調査の巨大サンプルのデータの質（誤差変数、信頼性、妥当性）は十分に高い。インターネット調査の協力者は大学生よりもむしろ動機づけが高く、研究に興味を示したり、研究への激励や支持を表明したりする者もいる。加えて、インターネット調査には、これまで大学生のデータによって得られた知見に外的妥当性を与えられるという利点もある。ただし、サンプリングに偏りが生じるのは避けられず、インターネット利用者と非利用者の人口統計学的差異（年齢、人種、社会階層）や、調査協力者と非協力者のパーソナリティの差異は、研究内容によっては考慮されなければならない（例えば、投票行動の調査には不向き）。

サンプリングのバイアス以上に問題なのは、インターネット調査の高い離脱率である（つまり完遂率が低い）。Dandurand, Shultz, & Onishi（2008）の問題解決実験のデータを参照すると、7.5ヶ月間のオンライン実験にアクセスした600人のうち、376人（62.7%）が実験を開始することなく離脱し、98人（16.3%）は実験に参加できるソフトウェア環境（Javaプラグイン）が整備されていないために不参加となった。残り126人は実験を開始したが、実施時間30分の実験を最後までやり遂げたのは27人（4.5%）だけで、99人（16.5%）は実験参加の同意確認フォームや個人情報入力フォームで離脱するか実験の途中で離脱した。もちろん実験室実験であれば、27人のデータを集めるのに半年以上もかかることはない。

そしてもう一つ、インターネット調査においてネックとなるのが匿名性である。匿名性がもたらす主な問題として、実験やアンケート調査への複数回参加があげられるが、この問題については次の実施上の注意点に関する議論で説明する。

インターネット調査実施上の注意点

インターネット調査では、従来の研究手法で求められる配慮の他に、インターネット調査特有の注意事項がある。まず、実験室実験や紙面によるアンケートにも増して、不備がないよう入念なチェックが必要となる。インターネット調査は、教示の理解度などに関して協力者からのフィードバックが十分に得られず、不測の事態に即時的に対処することもできないので、調査者はあらかじめインターネット調査で生じ得るあらゆる可能性を確認しておかなければならない。そのため、インフォームドコンセントや実験教示の理解度、ソフトウェア・ハードウェアの操作性などについて、幅広い層の被験者を対象に実験室で予備調査をする必要がある。また、インターネット利用環境もユーザーによって様々なので、モニタのリフレッシュレートや解像度、ブラウザの種類やバージョン違いなどに関して可能な限り動作確認をしなければならない。

動作上は問題ないことが認められても、反応バイアスにつながったり、離脱率を高めたりするような手続きは避けるべきである。オンラインアンケートの入力フォームでは、チェックボックスやテキストボックスやプルダウンメニューが使われるが、使い方次第で

は反応を誘導することになりかねない。例えば、テキストボックスの大きさが入力字数や桁数を規定してしまうことが考えられる。プルダウンメニューは操作が煩雑なので回答を嫌がってとばしてしまうかもしれない。事実、O'Neilら（2003）の実験では、入力フォームのデザインを複雑なものにすると離脱者が増えることが確かめられている。

データの質を担保するには、以上のような事前の予防的措置だけでなく、事後的な確認も必須の作業となる。その最大の理由は、インターネット調査が同一人物の複数回参加を妨げられないことにある。しかも、インターネットの匿名性のためにその識別が難しい。しかし、悪意にしろ、善意にしろ、複数回参加は結果を歪めてしまうので、同一人物のデータは取り除く必要がある。そこで、アクセス情報からIPアドレス（コンピュータに割り振られる識別番号）を確認する方法が採られるのだが、残念ながらアクセス解析は複数回参加の確認方法として確実なものとは言えない。なぜなら同じパソコンを使って別の協力者が参加する可能性もあるし、動的グローバルIPアドレス（インターネット接続毎に異なるIPアドレスが割り振られる）ならば異なるパソコンでも同じIPアドレスになることが起こりうるからである。とはいえ、複数回参加が見られるのはごく稀で、あったとしてもすぐ検出できるので、それほど深刻な問題ではないという指摘もある（Birnbaum, 2004）。

インターネット調査を成功させるための最大の課題は、ホームページへのアクセス数を増やすことである。その第一歩はサーチエンジンや関連するリンクサイトへの登録なのだが、それらからのアクセスをただ待つという方法はあまりに受動的で効率が悪い。そこで、次に行う積極的な働きかけが、協力依頼メールの配信である。しかし、こうしたメールは研究に関心がない人にとっては迷惑メールと何ら変わらず、無差別にメールを配信するのはマナー違反となるため、当該の研究テーマに関心を持ってくれそうな関連組織に協力を仰ぐのが妥当な方法となる。メールを読んで誠実な科学者による協力依頼だとみなしてくれれば、その組織はサポートしてくれるだろう。組織のホームページやニュースレターでメンバーに通知してくれたり、支援のメッセージを送ってくれたりすることもある。

海外の保育者・保育学生へのインターネット調査

以上のインターネット調査の特徴や注意点をふまえ、我々は海外の保育者・保育学生を対象にオンラインアンケートを実施した。わずか１ヶ月という短期間でありながら、33名のデータを集めることができた。もしも20年前に同様の調査をしようとしたなら、協力依頼文やアンケート用紙を国際郵便で郵送し、来るかわからない返事を気長に待つという経済的にもデータ収集の点でも著しく効率の悪い研究となっていただろう（研究計画の時点で実施を断念していたはずだ）。したがって、まさに本調査はインターネットの利点を最大限活かした研究だと言えよう。そこで、ここではまず、実施方法などの本題に入る前に、我々のアンケート調査の背景について説明する。

男性が保育職に就くようになって30余年たち、保育園や幼稚園で男性保育者を見かけることは珍しくなくなってきた。今後も男性保育者は増え続けることが予想されるが、それでもまだ全体の１割にも満たず[2]、しかも離職する割合が高いというのが現状である[3]。このように男性保育者が少ない原因は、経済的な問題、人間関係の問題、女性の仕事というイメージの３つが挙げられる（齋藤・平田, 2008)。人間関係の問題と女性の仕事というイメージは、今後の取り組み次第で解決する見込みはあるが（小林・竹田, 2008; 齋藤・平田, 2008; 高嶋・安村, 2007)、経済的な問題については、幼児教育や児童福祉への政策や国民の意識が根本的に変わらない限り、改善するという期待は全く抱けない。

それでは、海外の男性保育者事情はどういったものなのか。例えば、イギリスの男性保育者は保育者全体の2.2％（2001年時点）で日本とほとんど変わらず、しかも児童虐待をするかもしれないといった男性への偏見もあり、日本以上に難しい環境におかれている(Cameron, 2006)。そうした状況の中、どのような意識をもって保育現場に就いているのか、イギリスをはじめとした他国の男性保育者の生の声を集めてみようという着想が本調査を始める契機となった。

本調査では、英語圏の４カ国（イギリス、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア）を対象にオンラインアンケートを実施することにした。調査対象各国の子育て事情や保育制度については、他の参考文献を参照されたい（例えば、泉・一見・汐見, 2008)。

方　法

ホームページ作成

ホームページの開設にあたって、アンケートフォームを設置できるサーバーを選定し、株式会社デジロックが運営するVALUE-DOMAIN.COMにユーザー登録した。ドメイン名は保育関連のページであることを明確にするためchildcareとすることに決め、ホームページのURLはhttp://childcare.s373.xrea.com/となった。

ホームページの作成にはIBM社ホームページ作成ソフト「ホームページ・ビルダー12」を使用した。ホームページのトップに記載するタイトルをOnline survey on Men In Childcareとし、続けて下に、ホームページの目的、自己紹介、保育中の著者の写真、著者のWebサイト（新潟中央短期大学ページ）へのリンク、著者のFacebookへのリンク、謝辞とプライバシー保護の説明、アンケート、送信ボタン・リセットボタンの順で掲載し

2　文部科学省の平成22年度の調査によると、幼稚園における男性教諭（園長を除く）の人数は3,556人で、全体の3.7％である。平成22年度国勢調査によると、男性保育士の人数は12,100人で、全体の2.5％である。

3　厚生労働省社会保障審議会の報告書によると、男性保育士の平均勤続年数は5.0年で、女性保育士の7.7年、男性全産業平均の13.5年より短い。

た。作成したホームページを図1に、ホームページの日本語訳を付録１に示す。

回答者がアンケートフォームに入力した内容は、CGIプログラムによってメールで送信した。このCGIプログラムには、ホームページ・ビルダー 12のサンプルプログラムに弱冠の修正を施したものを利用した[4]。アンケートフォームの送信ボタンをクリックすると、回答内容が著者のGmailアドレスにメール送信されるという設定である。アンケートフォームとCGIプログラムをサーバーに転送する際には、ホームページ・ビルダー 12に付属するFTPツールを利用した。

動作確認はWindows XP及びWindows 7で起動した３種類のブラウザ（Internet Explorer、Mozilla Firefox、Google Chrome）で行い、アンケートの入力と送信に問題がないことを確かめた。また、Googleにホームページ登録をしてGoogle検索で検索可能な状態にした。

調査対象

研究当初は男性保育者を対象にするつもりであったが、高い回答率が見込めないオンラインアンケートで、数の少ない男性保育者に限定するのはリスクが高いことから、女性も調査対象とすることにした。もちろん、女性の視点からも男性保育者について有用な示唆が得られるという期待もあった。同様の理由から、調査対象は保育者だけでなく、保育学生にも広げることにした。

アンケート内容

アンケートは基本属性４項目（性別、職業、国、年齢）と保育に関する質問５項目から成る（図１及び付録１参照）。回答は、性別項目をラジオボタン、職業と国の項目をチェックボックス、年齢項目をテキストボックスで行った。職業の項目を設置したのは、現役の保育者と学生を区別するためである。

保育に関する項目の回答は、全てテキストボックスを使用した。最初に、現在働いている施設あるいは就職を希望する施設（問５）を答えてもらった。保育制度は各国で異なり、また就労施設によって労働条件や労働環境が異なるため、これらの要因がアンケートの返答を左右することが予想された。続いて、保育職勤務の継続の意思（問６）、男性保育者に必要な資質（問７）、男性保育者に対する偏見（問８）、男性保育者の労働環境改善策（問９）について尋ねた。全体的にネガティブな質問に偏っており、回答者を不快にさせる恐れのある内容だが、これは男性保育者についての問題意識を高めてもらうという意向と、回答

4　CGI（Common Gateway Interface）プログラムは、ホームページサーバー上で何らかのデータ処理を実行するための制御構文である。テキストエディタで編集が可能。CGIプログラムを導入することで、ホームページはテキストの表示だけでなく、アクセスカウンタや掲示板、メール送信などの設置が可能になる。本文中の「アンケートフォームを設置できるサーバー」とは「CGIプログラムを利用できるサーバー」を意味する。

Online survey on Men In Childcare

Purpose

We conduct a cross-cultural study to investigate male childcare persons' work condition in the world.

About me

My name is Shintaro Go. I am a 28 years old college student who aims to become a childcare worker in Japan. I was a businessman working for a printing company. Three years ago, I wanted a challenging work and decided to quit the company. Now I am doing a study on male childcare workers for my graduation thesis, under the supervision of Dr. Hiroyuki Sasaki, an associate professor at Niigata Chuoh Junior College.

My Facebook

Thank you in advance for your time and courtesy in responding to the questionnaires. All information gathered in this survey is done so on an anonymous basis. The results provided in this survey will be used only for the purpose of my thesis and will not be used for identifying anyone personally.

Please fill out the questions below relavant to your situations.

Q 1	Sex?	○ Male ○ Female
Q 2	Occupation?	□ Childcare worker □ Student □ Others
Q 3	Country?	□ AUS □ NZ □ UK □ US □ Others

図1　オンラインアンケートのWeb画面

Q 4	Age?	
Q 5	What kind of childcare service do/will you engage in? (In England, for example, nursery school, playgroup, childminding and so on) Why did/will you choose it?	
Q 6	Will you continue workng as a childcare person for life? Why?	
Q 7	What are the qualities for which a male childcare person is asked?	
Q 8	Have you ever felt prejudice against male childcare persons? In what situation?	
Q 9	What points do you think are important for improving male childcare persons' working conditions?	

Thank you very much. Please push the SEND button.

SEND　　RESET

者の負担軽減のため優先順位の高い質問項目に限定するというアンケート実施上の制限を反映したものである。

アンケート協力依頼

期間：平成23年10月６日から11月４日の約一ヶ月間。データ収集もこの期間中に行われた。

電子メールによる依頼：協力を依頼する保育施設の選定にはGoogleや各国版のYahoo!を利用し、「nursery」「preschool」「child care center」「kindergarten」「staff」等の検索語で検索されたサイトにアクセスした。保育施設であることを確認した上で、スタッフページ等に男性保育者の在籍が確認できた施設と、スタッフページが無いなど男性保育者の不在が確認できなかった施設に対して協力依頼メールを送信した（つまり、女性保育者しかいない施設は依頼対象から除外した[5]）。ただし、男性職員が園長（head teacher）や管理人

5　著者の確認不足で女性職員のみの施設に依頼してしまったところ、「女性職員しかいないので残念ながら協力できない」との親切な返信が届いた。これに対して、「女性職員の意見も貴重なので、ぜひご協力願いたい」旨を返信した。

(caretaker) のみの場合は除外した。

保育者養成校については、「college」「early childhood education」等の検索語で検索されたサイトにアクセスし、保育者養成コースがあることを確認できた短期大学や専門学校に対して協力依頼メールを送信した。

協力依頼メールを送信した施設及び養成校の数を表２に、協力依頼メールの日本語訳を付録２に示す。イギリスの保育施設の数が他の３カ国より多い理由は、研究当初はイギリスのみを調査対象にする予定だったこと、３カ国に比べてイギリスの保育施設のホームページは検索エンジンで検索しやすかったこと[6]が挙げられる。

Facebookによる依頼：第二著者がFacebookに登録し、個人のページを開設した。Facebook上で「men in childcare」と検索し、フォロワーの多い３ユーザーをピックアップした。この３ユーザーにFacebookから協力依頼のメッセージを送信したところ、ヨーロッパの男性保育者ネットワーク（非営利団体）から好意的な返事があった。数回のやりとりの後、Facebookのコメント欄に「Hi all I'm forwarding on a request from a male student studying childcare in Japan, I'd ask any guys out there to help fill it out, it only took 2 minutes.（日本の保育学生からのリクエストを転送します。たった２分で終わるから皆さん協力してあげてください。)」という紹介文が我々の依頼メールの引用と共に掲載された。

アクセス解析

オンラインアンケートへのアクセス状況をSamurai Factory社の「忍者アクセス解析」ツールで記録した。このアクセス解析ツールでは、アクセス日時、アクセス回数、使用モニタの解像度、JavaScript設定、Cookie設定、リンク元URL、使用OS、使用ブラウザ、使用言語、IPアドレスを解析できる。

表2　電子メールで協力依頼した施設の数

	保育施設	保育者養成
イギリス	160	35
アメリカ	31	14
オーストラリア	31	20
ニュージーランド	31	4

6　サンプル数の偏りを無くすことよりもサンプル数の確保が優先された。

結　果

アクセス解析

アクセス解析の結果、ホームページにアクセスがあった延べ回数は100回であった。このうち複数回アクセスが認められたのは６つのIPアドレスからだった。ヨーロッパ男性保育者ネットワークのFacebook上のリンクからのアクセスは51回だった。残り49回は協力依頼メール上のリンクからのアクセスだと思われる（アクセス解析では識別できなかった）。表３に国別のアクセス数を示す。イギリスからのアクセスは協力依頼メールに対する反応が多く、アイルランドとオーストラリアからのアクセスはヨーロッパ男性保育者ネットワークのFacebookの閲覧者が多かった。

アンケート回答者の属性

オンラインアンケートには33名から回答があった。アクセス解析の結果と回答内容から推察すると、複数回回答している回答者はいないようである。アンケート回答者の国、職業、性別に関する内訳を表４に示す。アンケート項目では４カ国以外は「その他」という

表3　国別アクセス数

	リンク元		
	Facebook	不明	計
イギリス	3	32	35
アメリカ	4	3	7
オーストラリア	22	3	25
ニュージーランド	0	5	5
アイルランド	20	0	20
その他	2	6	8
計	51	49	100

表4　オンラインアンケート回答数の内訳

	保育者		学生		その他		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	合計
イギリス	1 (1)	1	0	13	0	1	16 (1)
アメリカ	1 (1)	1	0	1	0	0	3 (1)
オーストラリア	0	2 (2)	0	2 (2)	1 (1)	1 (1)	6 (6)
ニュージーランド	1	1	0	0	0	0	2
アイルランド	3 (3)	3 (3)	0	0	0	0	6 (6)
合計	6 (5)	8 (5)	0	16 (1)	1 (1)	2 (1)	33 (14)

※括弧内の数値はFacebookからのアクセス数を示す。

選択肢だったが、アクセス解析によりアイルランドからのアクセスであることが確認できたためアイルランドと表記した。回答者の年齢の内訳は、10代が４名、20代が16名、30代が８名、40代以上が５名だった。

回答者の属性の特徴を挙げると、イギリスの学生とアイルランドの保育者が比較的多かった。イギリスの養成校の教員から協力依頼メールへの返信があり、研究に対する興味と協力する旨を表明してくれたことがあったので、アンケートに回答してくれたイギリスの学生の多くはその養成校の学生だと思われる。アイルランドの保育者から多くの回答が寄せられたことについては、ヨーロッパの男性保育者ネットワークがアイルランド人を中心とした組織であるためであろう。

回答者の性別については、男性７名に対して女性が26名と、男性保育者に関するアンケートにも関わらず、多くの女性が回答してくれた。また、リンク元については、Facebookリンクからの回答者は33名中14名で、ホームページへのアクセス数における100名中51名に比べるとその割合は若干低くなった。今回の調査では、当初アイルランドを調査対象に想定していなかったので、国の選択肢にアイルランドを設けなかったが、アイルランドという選択肢を用意すればもう少し回答数を増やせたかもしれない。

保育に関する回答内容

勤務先・就職希望先（問５）への回答は、33名中16名がnursery schoolと答え、他はdaycare center（３名）、kindergarten（２名）、preschool（２名）などの記述があった。また、回答者の中には、経営者とその職員という二人もいた。保育職の継続意思（問６）については、男性７名中５名が継続意思を持ち、女性26名中21名が継続意思を持っていた。男性保育者に求められる資質（問７）への回答は、「男性らしさ」を指摘するものはほとんど見られず、「女性と同じ」という内容が33名中13名で突出して多かった。男性保育者に対する偏見（問８）は、33名中24名が偏見を感じたことはないとする回答だった。一方で、偏見を感じたことがあるとする回答には印象的なものがあったので表５に事例を紹介する。男性保育者の労働環境改善策（問９）については様々な意見が提示されたが（表６）、もっとも多かったのが「男性保育者に対する社会認識の是正」を訴える内容（13名）で、「男女平等の職場づくり」の提案（10名）がそれに続いた。

離脱率と回答の質

延べアクセス数100回のうち回答者が33名なので、離脱率は65～67％である[7]。この結果はDandurandら（2008）の離脱率95.5％（600人中573名）に比べるとかなり低い（つまり回答率が高い）。

7　６つのIPアドレスによる複数回アクセスが、いずれも同一のユーザーからならば離脱率は65％で、いずれも異なるユーザーからならば離脱率は67％になる。

表5　偏見を感じたという事例

アイルランド人男性

yes. i was called for an interview, but when they realised i was mraiseale the cancelled the appointment and would not re-schedule it.（はい、私は就職の面接に呼ばれたが、私が男性だと彼らが悟ると、アポイトメントをキャンセルし、そして予定を改めようとしなかった。）

オーストラリア人女性

i have seen parents awkward about seeing male childcare workers, they worry that the male workers are deviants of some kind（私は保護者達が男性保育者を見るのがぎこちないのを見たことがある。彼らは男性保育者がある種の変わり者だと心配していた。）

アメリカ人女性

I have been in workshops where the presenter said "ladies" even though there were men present. Sadly I feel that the profession is seen as a woman's domain so men are prejudiced against unconsciously. Also, in the US I feel that men need to be more careful to avoid any situations where they could be accused of molestation. It's an unfair prejudice but all too real here.（私が参加した講習会のプレゼンターは男性の出席者がいたにも関わらず、“女性の皆様”と言った。残念なことにこの仕事が女性の分野だとみなされていることで、男性が無意識に偏見を持たれていると感じる。また、アメリカでは、性的虐待で訴えられる状況を避けるため、男性は注意深くする必要があると私は感じている。不公平な偏見だが、これがここでは現実なのだ。）

ニュージーランド人男性

Yes. My father in law thinks I need to find another job（私の義理の父が、私には別の仕事を見つける必要がある、という考えを持っている。）

※英文は入力された原文のままである。

表6　男性保育者の労働環境改善策の回答例

アイルランド人女性

mainly peoples perspectives on the whole early childhood education section, if it is valued more it might be easier for everyone to understand why a man would want to do this work（幼児教育分野全体についての人々の見方。もっとこの分野の価値が認められれば、この仕事を望む男性がいる理由を容易に理解してもらえるだろう。）

アメリカ人男性

Making the workplace more gender-neutral instead of overtly feminine（職場を女性的なものにせず、より中性的な職場を作ること。）

ニュージーランド人男性

if the goverment can support male teacher with some policies and benefit, for example if a childcare centre has a male teacher, it will get more fuundings. So the male teacher will get more respect and benefit.（もし政府が男性保育者に対して政策や給付金で支援すれば、男性保育者を雇用している保育施設は、より多くの資金援助を得ることができる。そうなれば、男性保育者がより尊重され、恩恵を受けられるようになる。）

イギリス人女性

Males gave as much right to work with children as female. Parents needs to be informed of the great benefits of a both females and makes working with their children.（男性達は女性と同じように、子ども達と働くための多くの権利を与えられるべきだ。男性と女性が共に子ども達と働くことですばらしい利点があることを保護者達は知る必要がある。）

※英文は入力された原文のままである。

空欄のままだった項目は33名の全回答（297個）の中でわずか８個だけだった。また、保育に関する５項目に記入された単語数の平均は、勤務先・就職希望先（問５）への回答が16.1語、保育職の継続意思（問６）への回答が13.8語、男性保育者に求められる資質（問７）への回答が10.2語、男性保育者に対する偏見（問８）への回答が21.5語、男性保育者の労働環境改善策（問９）への回答が31.5語だった。これらの記述量は、アンケートへの回答の多くが真剣に記入されたことを示している。

考　察

本研究の目的は、オンラインアンケート調査において、ホームページの作成、協力依頼、データ収集、データ解析に至る過程を記録することであった。そのアンケートの内容は、海外における男性保育者についての意識を探るものだった。以下では、インターネット調査の利点、問題点、注意点で指摘された内容に照らし合わせて調査結果を考察し、さらに男性保育者に関する意識について国内外のデータと比較検討を行う。

インターネット調査の利点

本研究のアンケート調査はインターネットの最大の利点を引き出したと言えよう。一ヶ月という短い期間に、イギリス、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランドという広範囲の国からデータを収集することができたのである。これだけの広域調査にも関わらず、調査にかかった費用はホームページサーバー使用料1,050円（３ヶ月分）のみだった。

インターネット調査のもう一つの利点は多数のサンプルが得られることにあるが、本調査で研究目的に適う十分な数のデータが得られなかったのは、実施期間の短さ以外にアンケートのテーマが「男性保育者」だったことも原因として考えられる。保育に関する普遍的なテーマであれば、さらに多くの関心を呼んだかもしれない。

サンプリングバイアス

アンケートの調査対象に選ばれたのは、Facebookの利用者と検索エンジンで検索された施設の職員及び養成校の学生だった。Facebookユーザーは全世界で８億人に達するとはいえ、Facebookユーザーの保育者・保育学生は、保育者・保育学生の母集団の中では年齢や思想などの点で偏りがあるサンプルだと思われる。同様に、ホームページを開設している保育施設も、調査対象となった国では母集団を代表しない可能性がある。日本国内で言うと、保育園でホームページを開設しているのは一部の私立の保育園だけである。

本研究の調査目的に鑑みれば、こうしたサンプリングバイアスは結果を大きく歪めるものではないだろう。保育者の収入や待遇の動向を調べたり、保育内容を尋ねたりする調査には、今回用いた標本抽出方法は不向きかもしれない。

離脱率

今回のオンラインアンケートの離脱率は、Dandurand ら（2008）のデータに比べて非常に低かった。これは、我々のアンケートがシンプルで負担の少ない内容だったことと、保育者・保育学生の向社会的人格特性が要因として考えられる。しかしその一方で、全体の３分の２いた離脱者の中には、記述式回答に負担感を覚えた者もいるであろう。我々のアンケートが選択式ではなく記述式の回答項目になったのは、海外の保育者の生の声を収集するという本調査の目的上やむを得ないところである。

今後行われるインターネット調査では、離脱率を公開してデータを集積し、調査内容と離脱率の関係を明らかにすることが望まれる。

複数回参加

本調査では、アンケートへの複数回参加は見られなかった。ゲーム性や娯楽性がある認知実験であれば複数回参加も頻繁に見られるかもしれないが、本研究のような意識調査に複数回参加を動機づける要素はないのだろう。

今回こうしたアンケートへの複数回参加は、アクセス解析により確かめられた。そして、そのアクセス解析は、複数回参加の確認だけでなく、回答者の国の確認においても効力を発揮した。というのも、国別の選択肢にはないアイルランドからのアクセスであることが、IPアドレスから確認できたからである。このように当初想定しなかったアクセス情報が分析時に有効になることもあるので、インターネット調査ではアクセス解析は必須の手続きだと言えるだろう。

協力依頼

１ヶ月という短い実施期間ということもあり、検索エンジンからのアクセスは全く期待できなかった。実際、アクセス解析の結果では、いずれの検索エンジンからもアクセスは確認されなかった。そこで行ったのが電子メールとFacebookを利用した協力依頼である。電子メールでは、253の保育施設と73の養成校に協力を依頼し、４名の保育者と14名の学生から回答を得た。決して効率的とは言えないが、本調査のデータ数をさらに増やすならば、こうした地道な依頼活動を続けるしかなかったであろう。一方、Facebookでの依頼では、Birnbaum（2004）の記述通りの展開が見られた。本調査のテーマに関心がありそうな関連組織に協力を仰いだところ、主催者との友好的なやりとりの後に、Facebook上でアンケートに協力するよう告知があった。そのおかげで、数日という短期間の間に51名のアクセスと14名の回答が得られたのである。

国内のSNSで最大級のシェアを持つミクシィには、保育関連のコミュニティが無数に存在する。したがって、国内の保育者をターゲットとして研究をする場合は、ミクシィのコミュニティに協力を仰ぐと、本研究以上の成果が得られるかもしれない。

アンケートの回答内容について

今回のアンケートを通して、海外の保育者・保育学生の生の声を集めるという調査の目的は十分に達成できた。しかし、本論の主たる目的はオンラインアンケート実施過程の記述にあるので、回答内容に関する詳細な検討は郷（2012）の卒業論文に譲ることにする。33名の全回答内容も掲載されているので併せて参照されたい。ここでは比較文化的観点に焦点をあて検討する。

アンケートの調査項目の中では、男性保育者に求められる資質（問７）が、著者がもっとも関心を寄せていたテーマであった。それというのも、第二著者が保育現場で勤務していたときや実習を受けていた際に、男性らしさを期待されたり、資質について考えさせられたりしてきたからである。この点について海外の保育者はどう捉えていたかというと、男性保育者の資質（問７）に関する回答には「格闘遊びができる」といったものもあったが、「女性と同じ」とする回答が突出して多かった。また、男性保育士への偏見（問８）は「ない」という答えが多数を占め、職場環境の改善策（問９）についてはネガティブファクターの除去よりもポジティブな側面（男性保育者の必要性）への注目が多く提案された。Cameron（2006）によれば、近年のイギリス政府は男性保育者を子どもにとってポジティブな存在であるとみなし、世論も子育て夫婦の84％が男性保育者に賛成している。したがって、本調査の結果と併せて考えると、英語圏諸国における男性保育者を取り巻く環境は、偏見を無くす段階や性役割を意識する段階を乗り越え、「男性保育者をいかに増やすか」という次のステージに進みつつあるのかもしれない（埋橋, 2002も参照のこと）。

これに対し我が国は、かつて保育士が保母と呼ばれたように、保育者を「母親代わり」と位置づけてきた保育観がある。そのため、男性保育士に対する抵抗感は依然として強く残り、男性保育者が参入して以来30年を経た現在においても、男性保育者との勤務経験がない女性保育者は「男性保育者は、身体を使った活動が中心になりがち」といった偏見を抱く傾向にある（齋藤・平田, 2008）。こうした状況は著者らも実体験として認識しているところだが、その一方で、高嶋・安村（2007）によれば、90年代後半以降は日本においても性役割への意識が低下し、保育者としての個性の発揮が求められるようになってきたという。もしそうならば、今回と同様のオンラインアンケートを国内の保育者を対象に実施したとき、海外の保育者と同じように性役割や偏見を意識しないという回答が得られるだろう。今後の研究課題としたい。

おわりに

本研究のオンラインアンケートは国内外の保育研究者にインターネット調査の可能性を提起するものとなった[8]。インターネットを介した実験や調査に関しては、未だ多くの研究者がその有効性を認識しておらず、データの信頼性に疑念を持つ者も少なくない。確かに乗り越えるべき課題も残されているが、それがインターネット調査の意義を損ねるものにはならないことを本研究は示している。

参考文献

Baym, N. (1998). The emergence of on-line community. In S. Jones (Ed.), *CyberSociety 2.0: Revisiting computer-mediated communication and community* (pp. 35–68). Newbury Park, CA: Sage.

Birnbaum, M. H. (1999). Testing critical properties of decision making on the Internet. *Psychological Science, 10,* 399–407

Birnbaum, M. H. (2004). Human research and data collection via the Internet. *Annual Review of Psychology, 55,* 803–832.

Bruckman, A., Jensen, C., & DeBonte, A. (2002). Gender and programming achievement in a CSCL environment. Paper presented at the Computer-Supported Collaborative Learning Conference, Boulder, CO.

Cameron, C. (2006). Men in the nursery revisited: Issues of male workers and professionalism. *Contemporary Issues in Early Childhood, 7,* 68–79.

Dandurand, F., Shultz, T. R., & Onishi, K. H. (2008). Comparing online and lab methods in a problem-solving experiment. *Behavior Research Methods, 40,* 428–434.

郷慎太郎（2012）．男性保育者の国際比較～海外へのアンケートを通して～　新潟中央短期大学平成23年度卒業論文

Gosling, S. D., Vazire, S., Srivastava, S., & John, O. P. (2004). Should we trust web-based studies? A comparative analysis of six preconceptions about internet questionnaires. *American Psychologist, 59,* 93–104.

泉千勢・一見真理子・汐見稔幸（編著）（2008）．未来への学力と日本の教育９　世界の幼児教育・保育改革と学力　明石書店

Kanai, R., Bahrami, B., Roylance, R., & Rees, G. (2011). Online social network size is reflected in human brain structure. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences,* Published online.

Kiesler, S., Siegel, J., & McGuire, T. W. (1984). Social psychological aspects of computer-mediated communication. *American Psychologist, 39,* 1123–1134.

8　オンラインアンケートを掲載したホームページにアンケート調査の成果を２ヶ月間公開し、アンケートを依頼した全ての保育施設、保育者養成校、Facebookユーザーにその旨を通知した。

小林真・竹田誠（2008）．幼児の母親は男性保育者にどのようなイメージを抱いているか～育児の相談相手としての可能性を探る～　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要　教育実践研究, 2, 17–22.

厚生労働省（2009）．社会保障審議会少子化対策特別部会第一次報告（案）― 次世代育成支援のための新たな制度体系の設計に向けて ―　2009年２月24日 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/02/s0224-8.html>

Krantz, J. H., & Dalal, R. (2000). Validity of web-based psychological research. In M. H. Birnbaum (Ed.), *Psychological experimentation on the Internet* (pp. 35–60). San Diego: Academic Press.

Kraut, R., Olson, J., Banaji, M., Bruckman, A., Cohen, J., & Couper, M. (2004). Psychological research online: Report of board of scientific affairs' advisory group on the conduct of research on the Internet. *American Psychologist, 59,* 105–177.

McGraw, K. O., Tew, M. D., & Williams, J. E. (2000). The integrity of Web-delivered experiments: Can you trust the data? *Psychological Science, 11,* 502–506.

文部科学省（2011）．平成22年度学校教員統計調査　学校調査　2011年７月28日 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016172>

O'Neil, K. M., Penrod, S. D., & Bornstein, B. H. (2003). Web-based research: Methodological variables' effects on dropout and sample characteristics. *Behavior Research Methods, Instruments, & Computers, 35,* 217–226.

齋藤正典・平田健朗（2008）．『保育現場における男性保育者に対する意識調査』：男性・女性保育者から見た男性保育者　盛岡大学紀要, 25, 67–77.

総務省統計局（2011）．平成22年度国勢調査　抽出速報集計　2011年６月29日 <http://www.e-stat.go.jp/estat/html/kokusei/NewList-000001039448.html>

Srivastava, S., John, O. P., Gosling, S. D., & Potter, J. (2003). Development of personality in early and middle adulthood: Set like plaster or persistent change? *Journal of Personality and Social Psychology, 84,* 1041–1053.

Stevenson, A. K., Francis, G., & Kim, H. (1999). Java experiments for introductory cognitive psychology courses. *Behavior Research Methods, Instruments, & Computers, 31,* 99–106.

高嶋景子・安村清美（2007）．「男性保育者」研究の動向：男性保育者に求められる資質・役割に関する研究動向とその展望　田園調布学園大学紀要, 1, 139–152.

埋橋玲子（2002）．男性保育者導入の目的 ―イギリスのある保育重点センターの実践に注目して― 保育の研究, 19, 63–70.

付録１

アンケートページ全文の日本語訳

括弧内に示した記述は、ホームページに記載された内容ではなく、著者による注釈である。

男性保育者に関するオンライン調査

目的

私達は、世界の男性保育者が働く状況について、比較文化研究を行っております。

自己紹介

私の名前は郷慎太郎です。私は日本で保育者になることを目指している学生です。私は印刷会社に勤務するビジネスマンでした。3年前にやりがいのある仕事を求め、会社を辞める決心をしました。現在、私は新潟中央短期大学准教授の佐々木宏之博士（新潟中央短期大学職員紹介ページへのリンクを挿入）の指導の下、男性保育者に関する卒業研究を行っています。

「私のFacebook（第二著者のFacebookへのリンクを挿入）」

アンケートにお答えいただき誠に有難うございます。この調査で知り得たすべての情報は匿名で扱われます。調査の結果は私の卒業研究にのみ使用され、また、個人を特定するために利用されることはありません。

あなたの状況について、以下の質問にお答えください。

Q1　性別　　男性／女性

Q2　職業　　保育者／学生／その他

Q3　国　　オーストラリア／ニュージーランド／イギリス／アメリカ／その他

Q4　年齢

Q5　どういった形態の保育サービスに勤務あるいは希望していますか（例えば、イギリスならば、保育園、プレイグループ、チャイルドマインダーなど）。なぜそれを選んだのですか。

Q6　保育の仕事を一生続けるつもりですか。それはなぜですか。

Q7　男性保育者に求められる資質は何ですか。

Q8　男性保育者に対する偏見を感じたことはありますか。それはどんな状況ですか。

Q9　男性保育者の労働環境を改善するために重要な点は何だと思いますか。

ご協力ありがとうございます。送信ボタンを押してください。

送信／リセット

付録２

協力依頼メール全文の日本語訳

括弧内に示した記述は、メールに記載された内容ではなく、著者による注釈である。

（件名）協力依頼

○○園（○○校）責任者殿

拝啓　突然のお便りの非礼をお許しください。私は佐々木宏之と申す者で、日本にある新潟中央短期大学で准教授の任に就いております（続けて、新潟中央短期大学職員紹介ページのURLを表記）。

現在、私が指導する学生が世界の男性保育者について比較文化研究を行っており、男性保育者に関するオンラインアンケートを作成しました（続けて、アンケートページのURLを表記）。つきましては、貴園の職員の皆様に（貴学の保育学生の皆様に）、このオンラインアンケートをご紹介いただければ幸いに存じます。

ご協力の程よろしくお願い致します。

敬具